遺老物語

油井根元記目録

巻之一

一 油井正雪出生之事 附 幼稚發明之事
一 油井正雪丸橋忠弥初而對面之事
一 正雪忠弥物語の事
一 金井半兵衛と云浪人をかゝへし事
一 正雪忠弥諸國の浪人を誘引之事 附 繪師彦兵衛一味の事
一 忠弥母異見之事
一 正雪平家物語評儀書の事 附 干物や又助の事
一 丸橋妻女物語之事

巻之二

一 増上寺のお化吉田初右衛門之事

油井根元記目録

巻之一

一 油井正雪出生之事 附 幼稚發明之事

一 油井正雪丸橋忠弥初而對面之事

一 正雪忠弥物語の事

一 金井半兵衛と云浪人を召しかゝふる事

一 正雪忠弥諸國の浪人を誘引之事 附 繪師彦兵衛一味之事

一 忠弥か母異見之事

一 正雪平家物語評儀書ける事 附 干物や又助か事

一 丸橋妻か物語之事

巻之二

一 増上寺の不化吉田初右衛門か文

一 駿府足洗村半左衛門と百姓之事
一 丸橋忠弥奥村八郎左衛門口論之事
一 正雪忠弥古例を引き異見之事
一 四月十五日清秋評儀之事
一 金井半兵衛吉田初右衛門大坂江越ス事
一 加藤市右衛門熊谷三郎兵衛推参 附 熊谷三之丞逐電ノ事
一 正雪物覚九右衛門ニ後悔之事 附 忠弥ニ藤四郎合力ノ事
一 正雪上方へ書翰遣ス事 附 下人八蔵之事

巻之三

一 飛脚紀州ニ到来之事
一 吉田金井返状之事
一 伏見船物語之事
一 八蔵天龍難義之事
一 彫然といふ出家之事
一 正雪駿府江越事
一 忠弥田代又左衛門ニ金銀借事 附 弓師藤四郎催促ノ事

巻之四

一 田代又左衛門訴人之事 附
一 丸橋忠弥搦捕らるゝ事 附 女房連判を焼事
一 宋四三郎兵衛逐電之事
一 正雪運気を考て自害ノ事 附 駿府騒動并駒井右京
　より駿府着之事
一 大久保玄蕃頭油井正雪対面之事
一 正雪自害之事 附 彫然介錯之事

一 正雪書捨る事 附 足洗村半左衛門召捕る事
一 吉田初右衛門有馬にて搦捕るゝ事 附 金井半兵衛天王寺にて自害の事
一 加藤市右衛門江戸に到る事
一 加藤市右衛門世悴拷問の事 附 越中守久能へ配る事
巻の五
一 駿府町中騒動ある事 附 美濃守殿自分閉門ある事
一 忠弥拷問の事
一 五日注進の者の事
一 麻布土取場にて自害の者ある事
一 谷庄兵衛久保寺に於て油原へ行ける事
一 丸橋宅にて拷問ある事
一 阿部川品川獄門の事 附 正雪辞世ある事
一 面々所赦免預り者ある事
一 鈴の森において所成敗の者有之事
一 丸橋忠弥究竟 附 辞世落書ある事
一 訴人の面々所御褒美ある事

油井根元記巻之一

油井正雪出生之事　附　幼稚発明なる事

夫油井正雪ハ生国駿府国油井の紺屋か子に依て油井とこそ呼ならはせる幼稚より家業を嫌ひ武芸諸学を好みけり専根さしときけるに其近所に有ける師に松本年といふ浪人ありけり常に軍書を目として或ハ京都の便を求め或ハ大坂の借るを投て講読する正雪ハ幼少よりこさかしき者にて師の尚ふを聞覚て軍書を試るといへとも文字のいやしきに日を暮し年を経ぬ中にも太閤記といへる書と楠正成か軍書といふものを年をふるまて読やめさりけりちゝみや良もすれハ是を机の下に隠し読ける正雪けにしもなけれハ太閤ハそれに及み花にて

加之て小筑坊とりいて節をなせる者已にさらしき以て既に
豊國大明神まてに成たりといへとも滅亡を甚きは天
天下なりと云ひなるとて　おそろしき漸十四代まてなり
楠とそなりしはあき勇士とてもはりしかや思及しまく
に菊水のはたを染め一巻の書を作り楠か末葉のやうよ
いひふれきれた人其ひとも其さしきふるまひ誉る者
ともさらにする方とありて過ぬ果して太は旗一巻
の系圖と浅間山のおもとをほりて唐櫃に入て納め隠
密に埋けるとや後に考へたものに染きしめ立なり
されは世に楠多門兵衛正成か影葉と沙汰しけるは正雪
武江にありて暮せり大名衆旗本へ出入仕り兵法の師と
仰られけるに或てよしとても高いふるや門弟を集め

夢物語と志なるは或夜楠正成と夢中にて對面とは
いふらつねはなく枕に立て正成申されけるは正雪は正成
我影なることを知りきるかな汝か生國駿府
浅間山のほとりしそさるきるさありとの声と姿と
きこへて夢は覺めぬりと語（かたり）けれは夫は実にありける
事子の中より聖人ゆめふしとはいへとも正しく真夢とそ
見るべし家にて見るやとうしにいふのちにすきり
正雪は諸それ手たれともなれ皆けれとも只信用し
からしとてそうはきと思ふ若者なりけるかたやりそれ若き
むしいは五人馬にて物ともいしめきて日々に徘し彼より
了達の名より念比に人数とつけて堀らせし唐櫃に用ゐ箇り
中に菊水の旗さらと系圖とを得たりすいは先そ所に沙汰

なとなてハ悪かりなんとおれさらし詞となし東武
よ气を持病して正雪に見せられハ油井を不思儀
なれとも心となりて衣を剃り張孔捨頭を正雪か
なとなりに落涙す此を世上に風聞して夫より油重人
して後にハ逆意の徒黨日を逐てきしひ付かり謀ごと
くれもなりことなり又一説にハ正雪東武にきいなしたる
時せり楠不傳といへる兵法者ありける楠か正成か末
葉なりて菊水のもる一流正成か秘藏せし中腸括相傳し
けるに由油井か行跡唯者にてなし未にいさるものにな
ぐしと目利して是を譲りけるとかやさるによりて正雪
すそ楠の末葉なりと人のいひなしけるとぞ理りなれ正
雪の正しき正成の正をやいつきしる説にあるなれとも

云ける者は浄沙汰にも不傳より相續しけると也
したる由されハ鶏鳴して木に登り鴨鳴して水に入ましし
て悪逆をさしもめる其必こそ乱に消るとや識ミ多
鉄騎ありて七人の形を得ける平親王も此謀の悪しさ
いそしとそ

油井正雪丸橋忠弥對面の事

爰に東武弓町の邊に丸橋忠弥といへる鎗の名人あり
けり門弟も數多有ける其氣さし世は常に越より
見ハ稀めと正成者にて宜成奉をとしびしすゝめけれと
とくにふくてるこぬ油井正雪といへる者東都に徘
徊して智ハ長良にと越勇ハ樊噲にと増りたる様に沙
汰有けると及より能田忠弥もあらうし逢たくやとてもし

なる處に弓師藤四郎といひける細工人忠弥方へ出入し
忠弥と過言にも及ひけるなり浪人の間の賄をも
藤四郎して世話しけるか其ころ夜四つ時分あわて浪人
奥山しけるといひけるを聞て忠弥か
出入せし後には一宿をもしける此人彼か計合にて正雪
忠弥か企を夫より念比なりしか果して逆意を催
両輪の大将と成益き謀叛をたくみしか終に謀叛は
顕れ請られけるか片輪車のすかたよりて丸橋屍を
武江にちに晒し油井ハ駿府に魂を失ふ誠に正雪と云正し
くきよむと読とこそ下は字遠ひなりやまことしくよごると
いふへきなりやと時の人評しけるとや

正雪忠弥物語之事

或時正雪忠弥かたへ行て一日酒宴の催ありて帰る
道にて道とつれて逢ひたるまゝ連て行野郎雪に遊
ふを見て忠弥ハ侍るハ半夜を過ハ心の中の甲胄を脇擔
て遊ひ後へ四方の梢まて皆加賀と成りしやと云けれは
正雪聞て岳く思して雪とか路とや両浅き瀬吉凶
たわむを一入悦ひけるか其わかせいハ刀刃の上にて消て不吉
の先表とそ知るへきなりしか火ならも墨みて渡りて夜
と涼気に及ひ上野の鐘八ツを告けり正雪忠弥に向ひ
半夜の笈銭を役訖の辛抱やこたへられんといひける忠
弥聞て一人とめは谷の長柄まて行と言けるとき正
雪忠弥か口をさへ声とさつめて一人といひけると向ひけれハ
忠弥はさらんと濱ノ川の音ハといふて止にけり皆り有

て忠弥正雪にいひけるハ東照公の遺言なりとて
色々といへども正雪日本六十余州とハいへども駿府
こそ肝要なれ然るに城地にていへば道ハ我ハ江戸に
ふたる所ハなきと答ける正雪何様の器量なるとも
されハ忠弥も天晴勇士の所存也と返答しける夫より
あまためしかゝへ正雪と久しくかゝふるの其弟ふいひ
募て後一味しけるとや
金井半兵衛といふ浪人すゝみ入ける
既に逆意の執正雪ハ丸橋に通し忠弥ハ油井に通し
て一味連判の外神文とかへき旗をまもりて思か
ハ其を信用せしも有との文信用も只中か其の謀かと
し其ほか者ハ偽りなし鈍なる者ハものに諫しもふ

諫くてハ語るにあらんと是あらんこれにて思ふ
まへきゝすあれまり談のうすと思ひ立へきにと金
子なくてハ成就しかたしと申けれハ忠弥申けるハ其
金井半兵衛といふものあり鉋かて一方に満てり其
ともしかしもやといひけれハいざさらハとて正雪方にて
様子語りの法を催しあまりある人を退て
油井丸橋の中にさしてすゝみ丸橋申けるハ油井正雪
とも只今存ん表向ハ浪人なれとも内々ハ紀伊
大納言様の扶持を蒙るといへども後立なり浪人の誰
ニハ正雪の従へきものあれと合せける事ハいかにとて
申ける金井を流石の者にて初より此称を察し
されハ辞退の風情もなく只うちうふつきける

斗と九格を油井と見ていひありて道川なきをとそふ
きふ志ゝしと思ひ備さる気色なれハさらハとて一國
一城を金井半左衛門とかきたり判形ニ血をちんと加て押き
りける後ハ五人の内一人之をくれをとらしいてよりそろへ
立具の用をなすとなしとかや　誠ニ金井半左衛門之

正雪忠弥諸国の浪人を誘ひける　附絵師彦
兵衛一味ニ入る

去程に彼人々ハ是ハ偏ニ天下とも川をへさるハ先智
謀の勇士を集めて其勇ニ順してその伝を成
就すへきことなりしかも諸國に群をなしける諸浪人
ともを誑催させんやと出つゝ手を射尽る政術も目に
見さる支度とそしけれハける先ニ多数手を越て

けるか彼國にていかなる志をさため入るとも志れす
只両人連判帳を蜜に見合せを懐に納め立去し
けるとかや　元来と思ひ立より人数を催しけるハ慶
間三四年ある人としとさゝやきすゝめて後一味のもの
とらしし和ける其中に正雪忠弥なとゝとゝもはしき
器量の者佐原十右衛門長山左右衛門志ありしかもとも
連判帳にハ一國一城をとそ記しける　扨又絵師彦兵衛
といふ者をもとめ入けるハ駿州久能の霊宝と云
霊宝写して一ゝ書せける　彦兵衛なとゝいふし物語
に夫絵なる事ハ我か三年の春秋とこゝろを骨に徹し
たる筆法術に作物と見えしは武将として甲斐の
信玄越後の謙信なとハ世をまゝにすへしとも矢数般

さへられたる雲泥の遠ざかりしはなき所ひるなき道のそれ
し夢の中に書る 野太道風が朗詠なりしをおもひ
おもふ
忠孫が母呉見いふやう
はかなし一生とおもへるに五十歳日に積て二万日経れども
身は万人を用ふれはさもれは材多は身と云に倒し今
此逆名は百千歳や経ぬらん松樹千年終に朽ぬ槿
花一日白栄とならは又かたら世露命漸く落をり来るに
とても身のよりし呉見とさし加へてぞ識ある思ひ
契りありし宵夜忠孫が夢を破りて閑をかくしひとめ
くらくらるを枕に当て思ひけるは汝と未だ若き子なり
誰が武士は忠をまもらしき節やただ一命を捨て子孫は

栄むすとそふは后はあらうで吉なうに時至て今
本望家より此方四代は天下押して或は勢とある男
氣て栄は栄とは此時にせり終を盛へ身に叙とまき
空とうける智謀あると申し及ましきそで此は
はかなき先こそあれたとおもひ出へき物とと絶て
くちさけるに忠孫を呉見しうはめきて在よろこと母
も押返して我と大孫を産ける母なり時とてもえぬは知
に久より物のせらるは勇に背かり世に盗つなきは仁にもちれさ
りましく母が呉見をまねはやまとをして身を合せ勝をか
めてまかでき尾にふまえそ流しりよる大孫を切る大事
を思ひさつなどの曲その本れは千度百度は呉見とそ只
似とふく打なくりてそなる識に天魔破旬は乞此

時に忠弥が肩にのぼりて　からまりたくみをこそ
すゑなる気つくし果して丸橋が母を鈴が森にて
に老木ハ史とぞ詠れけり
正雪が家物語の綴僕書なる所干物ぞ文中にて
変に正雪が正傍の文中とこゆる干物ぞありけるが
に霧と詠て星ととるあひなるいとあみとしてさかる
紛なく正雪が謀て事修て昔くの天気を伺ふる正
雪窓より空を詠めてかるハ八つより降べき也今宵
地震すべき程之雲立大風也ふとこそいへる渡らすの外
なくされば江戸にて逆意あこ謀ひしことも多ハ駿府
にありて先達て考へるとや正雪が家物語の往判
と作りける逆之露顕の後暗絶板と畢ぬ　全

部廿四巻之文法をよくして諸書に勝ることなり
誰かいひ久しく用ゐ来しは鼠も虎と成りさる時ハ虎も鼠と
なる由既に油井が天下の鼠と成て多くの人を損じ
喰ふるぞや書も木のつゞき捨もて巣に作る樹の塵
ともならぬなる

丸橋妻に物語ミ事

然るに丸橋が妻ハいかなる女なりや娘といふことを志らずあ
るつましくあさしむらハ茶を呑て居たるに妻常泡の立
るを見て丸橋にむかひけるとや飲みに立日の吉
凶を見様あると云ハ自然くの軍法に出たりいかさまに
も心に思ひて忠弥がいへる苦しき物哉忠弥書にいひける
いかにおもひ立後ハ斥時をあきらかに知らせ給へり

の暮行事に三四人主の妻秋と支度せり何条仕
損へき謂なしが然運ハ天よりて降るごとく
今わを減せへらん時ハいつとてひめで兼て用ども
心かけ置きすなり著するハ皆非也といひける
女房きれハ私の程ハ物ごとき心うきるにこそ
恋しうもや井しかえ懐挿のやい苦と心とさるり
せし男女志川わよ枝と舟て見れへもる人みるきの時
より世於くるとこそ何様お添り妻なとの働心を
いかりまへてし所用捨るましきなるよひとやなる
ねこそ此女のものきよて事露形のおりふし連判帳
と燒捨るとうやあの人の雅と披りふハ泥中の
蓮出るの中の善根なき後に太添男子二人あり

兄と弟と與市辰之助十五才と五才の弟なる
形見秩とおくべし濱井の門の色を延いたしもれなる
よおは忠添夫婦と心を一つにし相続錦
いつれか子とおもはざる先の後かハ品川に而とかり
過し見失の念仏なりとて又も一説よハ両人の子
發市左衛門ともものすなるとうや哀のそのことを皆
人々あはれむ

油井根元記巻之二

増上寺之不化吉田和左衛門事

こゝに吉田和左衛門と申者連判の楫打なりとは増
上寺の不化なる由されハ元祖法然上人を西方念の文に

まじりしと左のまささまぢふくめいろく一味連判の人
数ニ加へ名も武士太刀かたくしきをして兵粮の用山寺に
峯と積みなるもおひなし

丸橋忠弥奥村八郎太夫口論の事

秋の高き空と君が夢足は黄葉の色にこゝろつくして閑居の窓を
ひと閉て見る我心の中立や崩るゝ忠弥か格のあるの
梟を拂ひ奥村八郎太夫油井正雪落合二ッ三ッの
物語しと四方山の梢に渡りて飛花落葉の評を
告る事といふ其者いさましけれいへども八郎太夫は
とつて正雪をまもむ丸橋をいさみて人ならしかるら
丸橋かくしでうしきすや絶ふんと訊けれは正雪渡り
とうつ八郎太夫忠弥かるを以て迷惑の現（うつと）ふと制し

しけるをしりて忠弥又首かき切てとらぬ正雪切
けるハ八郎太夫忠弥をきこと白眼て是みて似合ぬ太弥
か振廻かな盤上の出来事三あるぞやとてふけなふと
某とあふより忠弥が一命ハ毫毛より軽し名ハ万代
に残る物を寸の虫に二尺三寸の魂とて刀に手をかける忠
弥ハ色をたゝえて尻うちかけしていさゝかもなしの八郎太
夫と真にしける彼の役正雪中に立て太弥を白眼て
奥村に向ひ只今の一事を用るに社あれ平穏碁なり
徒か色能の事に遺恨あるべき唯今立と碁盤押
直し打立けり其ときさる碁に正雪十四五目を勝か
ゑきさる打消しし三目正雪負ぬるにて奥村をいとけ
て平らに時の出来ると笑ひに紛ぬされハ也を油井八古今

の勇士智仁と兼たる武士の風なりけんそれしまて
柳氏八郎右衛門か先に一味なるべき者の手妙汰それなれ
ぬることハ此口論ゆへなりとかや猶其奥むしろ為六
かるめてよき口論と有その子ハ此時正雪ととひけ
るハ忠弥と一味の後一大事之所こそぶ急さハ丸橋か子
にありよしなき者に組して加る後悔なると心と
なやましたる案に不遠忠弥かかてより大事洩け
るなり

正雪忠弥に古例を引き呉見たる

八郎右衛門帰りて後油井丸橋に示したハ句践の古例と
川て物語しけるハ常ニ云ふれハ御車ならう燈る
ハ安啼し既ニ句践ハ呉王の不麻とふめて倉と

活して再び義兵を揚会稽山の恥と雪の謀六
ふしけるとやおよそハ千騎一携の者之上為ハいかて及
すや只下為にとしらとハいなけれハ西雪ハ留生の根才
雪なりとて主ハ玉川すなる清流なり万年の垢とと
洗ひ千歳の水を濯きまらん天下の兵をも思ひ内ハかり
ことうまれなりて大成ならうていかさまにと
そこ浣室の出と集め一評定なやまさべきみてい
釈迦にも心強とやも車の人へハこととふみて止の丸橋もされハ
大事とて大事とこそふ入て此へハこれそ奥村か命ハ千秋
ふみそれとそ口と閉なり添りし　油井丸橋か行ぐと
見なるに　油井みハ丸橋星目弱しされハ常との働ゑき
先の一目と論する目算していたし奥村なり核扱九

橋か方に生石なし　誠に正雪ハ勝たる手柄なりと評
して咲ぬ

四月廿五日の扱評儀にいはく

鼠ハ社によりて尊く　狐ハ虎の威をかるとかや　正雪
紀伊大納言殿の御名を笠にかふり　叢に忍て國々
と語らひける　既徒黨弐千余人とぞ聞へける　是に
時節を考ふる時なりぬるハ　大将たるべき器り
やうの者をすぐりて國々へ立　城下しへ忍をを一時
みるすをもうしたやと　密に廻文をぞ認る　依之四月
廿五日の夜中合へき儀ありて　九ツの鐘を限りて待居
るよしを書たり　此寄合　丸橋忠弥方に正雪すと
と又ハ道灌山のるとも　いつれともしれす

其の夜より合ふ者の名ハ

油井正雪　丸橋忠弥　佐原十兵衛　長山兵太夫
吉田初右衛門　平味治右衛門　同七右衛門　桜井喜兵衛
岡田弥右衛門　岡村治太夫　加藤市右衛門　櫻井彦兵衛
加藤七太夫　小川六太夫　斎藤九右衛門　土屋八郎右衛門
岩口六太衛門　同三七　栗原又左衛門　向坂甚兵衛
福嶋伝兵衛　原田五右衛門　渡ア才右衛門　松田甚兵衛
河内山八郎右衛門　宗田平兵衛　河嶋三太夫　宗田七兵衛
同又右衛門　金田庄兵衛　松田弥五七　曽根七郎兵衛
井上五郎太夫　草下六太夫　野田庄兵衛　栗屋三左衛門
平川次兵衛　材木や又兵衛　絵師彦兵衛

けられても今は一流に成て以用とすとぞや命は己か為し
なり名は家となる一つには名を重じし二つには命を
全ふしゆゑに二本道なるは佐已と而なりけれんこと
は是偏に隠ひは必しも千万通りの儀也節は覺束
なしといへども外に拠なき為しかし単ことむと
ひとたびへも先とふらつてことかへらざる所合へきまし
はいよいよ評儀日心のうへは其日ときおへきにけ
左故大日限の義重てお斗ひ下や鶏の声と共に
此上人ならは閑かてゆへいさらはとて各退出しける滅
すし庸の谷の合合まは飛子の首ととりて先表
としけるとや夫は僧都先正雪夫は兼形先は丸橋忠弥
冥界か誘先は冥途黄泉の足代とぞすへける此面々と

いふなる先表か振巳んされは只禍の門京は禍の根口と
聞し涼し暮せば身を安んするとかや是れより
なふかふまふかにのみ先をもとめ評定なり

金井半左衛門吉田初右衛門大坂へ越事

吉田初右衛門金井半左衛門は正雪か下知に応じて京馬に鞍
添て既に難波堀江の悪逆道まで趣にける日を経
て摂州に着て半左衛門は但吉の先に蜜なる斬捕と
定め在る初右衛門は有るに落着る者能き人あり伺
ひて城内の通路を待とゆくとも誰かは名を抱て泳渕を
守るべきそや宮しく日数を送りけるかして不と代宮
の兄丈も口惜しく送りけるさしは湯治と偽りて有馬に
逗留し初右衛門と一所に在てりとの体とかくらさるや

ともしひ住うきしらる住吉と立ていふの笹原押分
て有馬へ行てハ趣なれ初音と先カを以て去名自
の夕アハ同し 枕を詠め に鷄のたつ 胡夕と交 そる
のりまふらむ ある葉つ書多の初音の小向ひたし秋
も住のへハ有り所体との気にまを踏出してゆと語
出ハ初音の すてさんハ所出を落れ門の草むらのむし啼止
めてゆといひられハ猶すそ内にと 蝉の群さる声の丈へ
ゆきそ答へける色ゐは熊坂か智みと越へ石川か思出に
と勝さる者かふされハ正雪ともいひけるハ大事の一ケ所と
と仕そふせてやハ此方と其気色をもうりうらむと
しふさ目利なり 或人たハふまして正雪ハ忠弥に同し丸橋
と熊橋に至て出さ 天道にと叶ひ書名にふハ言

初太郎と無しき
加藤市太郎 熊谷三郎左衛門 赴無附 熊谷三左衛門逐電のこと
左衛門田村の吉次がお里の別とは いつの世の人かいひ始
ける 既に関東の素の史氏をは見捨て賀茂市太郎熊谷
三郎左衛門ハ日数十日斗を経て京売し 朱雀の高辻に縁
求め足跡とめけるとかや 初めのなとは彼是何にやらに
見へけれとも猿猴の月を影し鼠猫を望むに等しき
いさらことといふくして或ハ東山の桜に花をし藤の棚ノ皇
越て紫のゆかりを もよしをなしなけきにあまりぬるの
うあさふきしに旅ハ人のゆくを見なからに独寝させぬ枕と
かうしハ四条の涼し嶋原の夕アもさるこそのあらんうち
そらもれてなりゆきさとにいつしか此方にと曲輪に

入て暇ある空に捨しさびつゝを　修京に一際見ゆるあれ衆
て用意せし武具料と見ゆるに換失せり元来色
好み花に動るハ穎ある者に逆意ふれ見も咲まる心
よりも其了或夜加賀熊谷ねし世に折まじりて雑談
しけるハ加藤どの遠々東武ノ有さまして見むかしへ
所詮かゝる月が度世に角を直しけるて牛や殺し
にすといひふまじハ加度されハかゝる栄花ハいかに思ひけれど
係になる所を以ていへハ於る生能の勝鯨波とあげて
栄花の精と見ゆるにさるみてしていへとみへるまじハ
然谷心中におもひけるハ荘子が多男子ハ懼富ハ
多喜表ハ多辱是三者所以養徳なりとや渋々
家を風のおのれ燃る火也ともおもひ返して加賀の関东に

事心へかりし一先ツことむきこまれたりと何ちやもと云
すかして行衛をさまじすなりまゝ後に白状のこと
ありて所存まじまじど測かや山子や義りぬるところ
止らぬなり　煩悩則菩提生死則涅槃かと金言とかゝる
事とや　或僧曰柳汝ハいかなる者ぞ是仏也非ナ解
替しといふて止みぬ既に熊谷も此時於仏志ありん
孔子曰此恨時まで遠のこすあれとも見此物語後府
江戸に於て両筆なるを合しけるところゆへ写し遣
めあり
　正雪彬然なる後悔ところ附忠弥々度四郎合力す
富貴ハ諸願満る元なりされハ弘法大師ハ三寳に
大黒天を安置し　またに伝教大師ハ比叡山に三面を尊敬

古衣に入れし隠しかども至りて其月宛てて大形に出へ
きれども日本一の出来なれども欠るゝハ免み滴ゝるゝハ十ヶ一ばか
り油井丸橋と京都大坂のすて心ともなく出郷をき
て事の起りを問ふやと評定しける忠弥下人八蔵
といひけるハ下りて正史まとありしが元来徒黨の一人に
して此暮隠密の者なんるとかり上下人のやうにし
らへ誠ハ忠弥が懐脇指にて当りるを度大事の役目
て八蔵こそ安堵のそのなしとて正雪書翰とちるゝ
をよ短指を入しとかや抜てさ袋に納めて八蔵が
襟にそを縫せける正雪中きるハ不思議の難にと逢
ふはとく焼失べし不似ふるゝすれいへハ女見出へたゞへ
ハ家に一人の女ありしを男とうらいけるにはじめの

程こそあれ夫の日之聞てやをからをとひ女の
横顔を一るにさかしけるに一つれ文あり女是をつく
りてとく呑けるとや果して其不心支配をもり評
家に及ぶといへども其所にし男衍けるハ拷問ハ女
のそうにへるゝちうりて流らんあれりしと中しなれ
ば此文ぬるを知るとさつれ名すてあるとぞれうり
鶴中待みは讃ゝうるゑのの首とらけられいるう
そことろそいづや常にハ仕事残場にてハ生死の二字と
かけられるゝ思ひともそ中るる八蔵のりしとのかるゝ
とすて天晴正雪が江ハ園に植てとかくれ思ふや正雪の
るいるなれ梢ハうれど秋樂の門出の拍子に忠弥
酒をすゝめ正木のうつりとて謳つゝもでめて度の旅立をり

油井根元記巻之三

飛脚越州に於来りける
既に八蔵は取と日に移りし先様及右馬に登りて
かたへに対面しける吉田手世なる男に
て関東にてはいかにと問ひ彼て金井へ云かしと告し
に金井大夫勤務してかやうの義部しける
とくは別方の座へ拓付き吉田方のうらしくそれをかくて
れやあまし兼てよりかもしある条いひしといひ父れも吉田
申笑て候と用章かみを関東より隠蜜の書能吾
来しては先とともし両目にうけてやそ分れ文讀終りける
ありける此月気や入ふとりわれは金井を案じおとゝ
して重五ヶ月出役のことを答へけるさししは件の書

翰とかときに初右衛門立板に水を流すごとく讀み終りて
それ中に大分塩硝が出ると金井吉田より見て訳ても
まで下な家用意のこと感じける吾来が一通に云
以書翰関東にて執ておきまいらす一つ二つにはよきか
扇中より金子桑添ひ物欲なし又及延川関
東より来りたる所に先立ち秋中より北より急き
之斗儀は一円に変じ振扇は名残に開化を試むべし
仮様之斗暑遠くは長良にと越へ近くは父祖正
成にとるて浄入てありしは初右衛門及子は有馬へ移
延しに其地は化出に尽すことしは所好て油らを
まなは此移運は蒼海より移添しまで東運らしては

隠し斗墨ヲハ城内色々ニ要ニ以委細ハ於途中
以ヘハ追テ可申達候ニ以元書勝ニ候不備出てあ
大中可ニ以上

慶安四年五月　日　某人

吉田和泉守殿
金井半兵衛殿

和泉守二三遍くり返し一覧を見て源正雪ハ文武両
道ニ達者なりと誉ニける
吉田金井在状しニ
後ニ両人額を合せ膝を寄せて相談しけるハいか
成ごとくいて吉田どのいつれニも器量仕抜す男也者を
一目しられハ了に各諸より一諾とすくす諸ニ二人

を撰ばれるるやされハ只今より日数を送るといへども一家
小身なきに等しと云けれハ吉田申て言けるさていむかし
より名将の謀多有といへども先ニ収まるハ十か一之九一
命を捨げ身を埋て盛衰の條ハならけるるや先ニ
似得る所やいまた上関東にとる延引あるよし申
来る只此上ハ是非なく小返答すべしといへとて硯引
よせ墨摺なし筆を染てぞ書される

其書に従愛元後ニ思ふ旨を合盛衰相以帰元
不知案内ニ者ともに旗下と可相催すも千度まで
百度討ても源探ニ成以中ニ実東ニ器量ニ悦ぶべき
無しと似ても依ニ念なりと返りいえと関東ニ候末

豪気沙汰ニ候条日本一之大手不足之候得共左と
云ふ事御座候へハ兼て御評議之趣日限ニ任せ縦横
事之儀鉄を以堅め熱湯を堀ニ流へ候共何様ニ
合候儀ニ御座候得共何ぞ何安候事ニ而も要所へ入
候而も上常地傾申候事及御座候ニ付城中延年百人
城を堀りとや、かりそ吉左衛門入候遺書並勢
申之候様ニ而御座候 以上

慶安四年卯八月

油井正雪 印

金井半兵衛

丸橋忠弥 印

吉田初右衛門

柳営御成之節ハ元来増上寺の會下蛍雪の窓を求め学

読の字まて論と及載の事ぬに上京すへき所にかありける
所なりや品川に會合とそけ終に還俗の志を成ける
よし元忠孫大欲の者にて彼か金銀に富るを借へすて
押傾せんやと思ひしより彩ハ竹らしい事史をも俗の
罪ハ五逆ことも勝る十悪ことも越へけるとやすさまし若
又何やされとも丁度文字他ニ紙て面白ハ字見える

伏見船の道しるす

八蔵をすひけるハかくて後ニ数りを送るへき所に
ふしきにハ逆帳をめよしてそ云入ける 金井 吉田と
云参なと尽し禮儀あつくふしても云なりてそ 御金井
八蔵か身を引て古例を引て川むかそ従ける仏字
文学上人ハ形様ニ而謀判をたくらめ有る荒の御所なり

院宣を乞請しより源家の類葉にを相催し清盛法
をたひらけ納め一天下を懐にふしさりとや
乞俸文学かあとさらすて下なりとや法皇川の跡を
思ふに其功莫太也根をほり葉を枯して御討伐すへき平
家の嫡々六代御前をさへ訴へ許しをしられは
其恩に当ることめかしふ文覚をこそもらしき
報恩の為と動めるをもへ此を顧み恐れ家とも在ゆ
と論し謀りて秋は反者へ居まとりて乞より八蔵は使船
を求め船の駒の癖あれは棹さす船の流れを乞の
猜の後をく伏見とらや出しみと似を見へきらふ
都合の末をりしくに許しりるは変はさうもや八幡
山ふを関白秀吉の臣隠居不あて其比は花の都は月の

難波にも賊へたる栄とかや誠に世の時は其子す
らうらの布文に吟へり衆世の移るに似せて桃花の色
郭石ノ声のきかしはむかしをとりしは御持世を守
侍るや
露と露すとや消ゆるからかさなる蛇は体の名を夢まと夢
誠に盛者必衰は夢になりて又ゆめにも邯鄲生か一炊の夢
は五十年の人の栄花の胡蝶の荘子か蝶の夢は我と忘るる
抑式秀吉公は木下藤吉と申さるる小蔵の人の家
又そもそも語の中にもいつか仕合人やさへかれ
の耳たふは学きて見の瞳は二つあるあんと語るに合
けり八蔵つくつく思ひて我を大名の相あるといふ見捨ても
こゝやと身にふは其の相のあさと申す主へあるを急

際嗜る表白綾の表に紅裏うちたる帷子の茄立やう
於て廣袖にして是を着し小振持の黒かりつかさ々成と
志とけふくらいたきて手に十八遍そりあふる徒黨の者と
くふうち向ひけるハ汝ニ多年の大望迚を済ハ第ニ中合
る迄り某七月十二日駿府へ發足変定けしハ切面ニ丸橋
どの大将として赤城の指揮あらむ 唯ニも知とも退す
その仕様しるき念みに及ハヘ上方へ早ニ先立て其沙
汰申迄ハ汝ニ某駿府へ同道す由人数ニて 油井三左衛
熊谷三九兵衛 将野九右衛門 土方左衛門 法師を以
麻然と於てお使ひてやしとれと云々勇しむ気伸り
参り柳此麻妙とや 法師八日蓮上人の遺戒と法華玄義
に入てハ妙法の五字明らかめ手句みといて八十八品の仏に

通して自一念三千迷ならぬ身ハ延山の法燈を
かゝけ奉る豈をあふかる徒黨ことも代々の曲
事なれ天地武を恐し色をなめる曲者なれて
百矢貫る徳の境界なり兼好か日多小亂あり候ニ法あ
りとハいへるかゝるとや侍へきん
正雪後府に趣ける
其急ニすへきものハ徒黨の浪人敷の者をかる
こしらへ置家財雑具を代なしてとらせ遠に
てあれやしたとへハ第人のおとしきものニ正雪ハ七月十二
というの吉祥日と定めて其黨五人草履とり一人主従
三人ニて武江を立ちれハ品川海上天をうつし志のの空
とつゞきて晴渡りける光より驚是をそれて且ハ里の名をと

とし山の名を聞て眠を拂ふに伎りとせかさなきに
秋の来ぬのいろなきも虫の音を白露に結ぶ所
未傾しとかぬれしや正雪鈴虫の声をききてとハ
下河に鳴こえ鈴の森とは誰か志りしとこへき
と鈴虫の誰にとふて夕暮をうちこゆむれる行
其に物き妖眺望金川の有にあり津井人や海り
鈴と鈴木ハ集て徒黨の旗落合し　以上十人花と
隱りけるこそ　出走けり夜にてやりともゑ行列
と定め六尺ハ一尾にハ旅僧に扮れハ扉ハ轎を改
人足ハともひしに皆笠と飾り無常を張テ雖
目にもとめずとはえへざり夫秋ハ友澤に枕を交る
向け夢を結ひ明まハ大に面まる顔物もやあん

空の行衛と見来つつ鶯花を立馬を休て日新所望
の其様あり正雪は此里の名従ろ知りてのと問れハ
六郎左衛門白旗の里とそ答へける正雪ききてとんと昔
物語としけるそれこそ源九郎義経奥州高館の城
籠り鈴の形郭にて自害し給ふ其首を
鎌倉に登せけるといふなることや石の上の鶴岡への
所へ参りに従ひ今白旗の明神と申ハ判官義経弁慶
か首とかや獨り他念を量切之と伝はまハ熊谷ガ
かいるに吉備物語ことのいうのとをし所立ぬ天気と
日本一に扱ていと口すさみ以上井あともみて見し所
あり其秋の小田原に旅宿して夜折波の身と洗ふ
されハ白川の流もハ双六の塞（サイ）加茂の川と山法師とそ

詣りましふといひていつまていかすしてかゝる浪の汐路
にもましかる廻らんと各借りをきあへりける鶏の虚音
ともなる事かや霧とそふなし鳥の足馬の鈴音
ふもして枕をはなちて人ゝ急ぎて立なれハ箱根
の峠にてあはれなくと成にけり東ふくを望ひ
拝用し権現に奉幣し夫より関所にかゝり是れも
西雪が気を彼の方へ寄て家物の戸を宿こと也ハ紀
伊大納言殿家来油井西雪とも申者にて此りは前の子
にて紀州へ罷越い長病と申家老が勢家の院
のと云入られハ関も一ゑの往来の旨と度ハ通りしとて答
へありて三嶋の宿より見て抱をなし三島の松原六代
御前の旧跡成石塔ハ形斗に残りて哀をも覚ゆ小際り

此文学り働とおもひなされ惣うき嶋ヶ原是栖山
不二の裾野に種色と催す気色を路に残し置て吉
原の宿に至り正雪疲絶りに向ひ湖潤縫後半急ぎ絶とぞ
されハ疲給り漁舟越雪行どもハせんかたなしと詩にとありけ
おもしろく出ささりてもあはれぬと申す招野九右
ハ只せむかたなく今少急ぐべきにもなし駿府へ七つ時
にあらあんとの辺にとふらそうしかゝる旅みてもいと
あゐへさとせきて息ととなへひきもみることぞなし
なりかましりたりしにぞ時より駿府へ七つ時に着なり御
錦と見て大きへ内宅の宿してもゆかしければ寝て泊
かの町人桜屋と申者の方に西雪と泊め旅合十人
見ひやふ旅宿して休息をなしけれ実や大魚

は濵に鰧と妻て漁父の為にとられ　西雪は兼ひ古
へに帰りて安部川に面とさらす　何也しゆへなるに
忠孫四代又九郎に金銀借るを　彼弓師為四に催促せらる
東武にも岩孫あらぬことあることを尽し　彼れを用意
せらるに大方首尾十と九つにを定りたり　丸橋つらくおもひ
ひたるは貧家には歎知もなく　備しき家には故人の談
しともや　何様用金のなかりけれ　さるはいかゞせん　されはとて
従ふ方へさとても　案じけるに　実に四代又九郎といふ浪人
まり是をも　ゆへある身限の志ありと思ひ　彼に見せ
わけを語りおいし　然し又九郎は大事にて是とも　方合ぬこと
ゆへ　其言をとけすれ　何様重ては事入いそ　答へける
丸橋いひけるは　忠孫　眼の違ひさるまや　某文に為とて

なるや　拾両のは百あ百両よりは　千あらむ　思報に入べき
にあらずして　助ひ借りても　急ぐとて又九郎が耳に口と
よせ何ごとをふくさきけるが　知人なし　皆ありて四代
うの　借き用金　拾六七百ふても　九両の　刻きりをね
遠州の為にては　只今其　借ぐの　服あく　皆の源に
之とて　或ハ恨　或ハすかして　帰しける　丸橋星の色と
道の友とふし　其茶の水へ帰りけるが　為に声のなる
ものありに思ひ寄と　ともひ是と　何事弓師為四に
又例の金子催促ありしや　いかなるにや　われ行なきも
のあしましと　語りて　さうさもやと　ともひて　為面とげ
太孫云けるは　拾両にて百両返報ともひ　帰りていへとも不審
晴けりぬともや　さしはやおとろくき　是ぞは迚もなく

あると女房とゝめて西雲寺へ返しやり追出しけるも
それより後入道と云けれハ太郎井くめを斗答て
色々夜四ツ時分とさゝやきけるかれこれと町人共らに流る
武士ふんと配下の者あれハ一味の様に知らせて
私宅へ帰り蚊屋の内に臥ゐたち身をかくしける
起てあちこれかゝる不思議人をこそあれ其代ゟ坐する
後人の鏡となすべしといふて襟口をおとらしてひと
めさきあへる事なきめおかしけ女房はかまを見て悲し
や夜四ツ時分の後の事なりけるやとて回し様子をさぐる
夜四ツ時物よりハ相もかす狐を見とられけり後を追ひゆく
隠れけると云捨て本丸町屋敷にて不谷将監方へ至りつ
きけれハ其所々人こゝろありりん御当所の灯燈ハさし出

かゝる深夜の事也しけふとし

油井根元記巻之四

四代又兵衛浪人の事

却て四代又兵衛ハ忠弥とむかしより懇意にして先達老中
へ手入丸橋か耳雑談の細一々申進ければ各々驚き
置せす禄寄馬に乗所にて上方に参し御運の程を
感しける爰に夜四ツ時分は不谷将監殿へ浪人ども
られハ将監殿所望面会にて先生を申進せられと又以て
相労らぬ神妙なる浪人定而上にと所忠節に光る
にて下しと別所の情面の事師夜四ツ時とありきりて又いつ
あるべかり浅草林理左衛門といふ者浪人の数とて

申さしされハ松平伊豆守殿へも同日ニ訴人有し
故勤ニ及ふ奥村八左衛門連判ニ奥村権之丞田代又左衛門
とて有けるか彼等ハ伊豆守殿ニ直ニ訴出縁ニ依テ
御息松平甲斐守殿ハ此さたつりと不便ニ思召て御所へ
訴申候 注進しけれは御出へ参りけり奥村権之丞田代又
左衛門も難儀ニ及ふ故ニ参りて伊豆守殿 御前ニ披露致しけり
参りける伊豆守殿事ハ出仕の時ニ参りて万端を取扱
常ニ心も尽させられ左畑ニ府田蛭藻の伊豆守殿
ト人やりけるふりて天下ヲ召したるけハすく〳〵ぬ者ニてかゝる
事ともなりけん

丸橋忠弥搦捕らるゝ附女房連判を焼事

既ニ正雪ハ駿府ニあるよし訴人ゟ組ニ仕せ駒井右京殿

討手ニ御仰付されハ未明ニ忠弥か宿ニ趣き家中近く
の用意して各路をふさきける扨又丸橋方へ今の秋谷
松盛か向られけるは大切の囚人なりけれハ近所の者
ともハ井戸へ水交りて忍られける家ニ松信の者
をかこひ置へし四方を堅め火事とよはゝりて表門
に踏込へきよしいひあはせ松盛殿は草鞋をはき
御巻をかこひ忍ひて忠弥か隣の家ニ入て扣られ
ける時分こそよしと合図を鐘ならせ火事よ水よ
とののしりさわかせけれハ忠弥か寝耳へ入て女房を起
ひとへ帯をしめ刀をぬき合さしをりかけるを忠弥
か運の極めなる既ニ酔たる八蔵も起き驚かされ
て起て起戸をさしけりと叫ひやいふや一さんに馬を速ニ

忠次もろとも組忠次なりしかひなくて丸橋もともにさや
つかけにけり着けると次右衛門とかいはるゝ二三間投かし
られて返すを二番手よりもてん手落合く待に縄目は恥に
と及ぶる衣忠次猛はその恨みくと生捕まゆる
天命は猛こそ鏡なれ其頃に女房ハ奥に居りける甲
斐しく達引帳とれ出し持つる紙帳を見とつ火
あかけのほりしと付て一時に灰とそなしにける奥
にもあと欠込と女房見て恥かしきは猛は事あてを
ありしは唯老たる母と女ぞ人なり静かに入はわらしと
髪は不乱とあらい梳り出しそのけと直し衣紋
作りてぞ今はかゝりける手をも日比ハ雷に耳を閉
地震に魂を飛ばせるハ女は習ぞかしかゝる折にあて命

を惜まざるハ楊由が矢を隠し虎が尻を惜むにも越
ぬり誰かは是をおしまぬは有ん巳に石谷が従者
ハぶんぶんは働く矢壷に入て忠次日母女房下人八藏都合
四人に縄をうけてぞ引まゐる後は世は首途とき
ぞや心細かりけん

柴田三郎兵衛逐電のこと

爰に柴田三郎兵衛といふ浪人ありしを徒党は一人
なりしが町とりやつに隠れやつしてありけるが来り
さる業をなすといへども漸くとその身[illegible]文のみもて着し
居る様もなきぶふ新きけき町家の奥に垣に生ひ立槿は流
れに見捨かねしや朝露ともろとも後水尾院の御製
しき御製とぞかしとられ先立ちものはと思ひくゞ

てありける折ふし所に徘徊せる髪結ひ隣に来て云ふし
ともの語しけるハ此頃ある町とやらの捕者とやらん
其頃府内に浮勢ある大へまかり御中ハ丸橋忠弥と
いふ浪人に捕りしと語り捨て行を正雪聞て南無三
宝ちや事のあらはれけるぞやかくてあらんハ灯火と密書を
焚の出なり合の外仲の宝やある類ともを取て
逐電しけるよし御府天の霞に不地の気すら不
仲間をも其身の隠し家にせん

正雪運氣を考て用意しける附駿府浮勢する兼羈
大気後駿府へ忍びける
去程に正雪ハ七月五日の早天に出て東武の方を見捨して

仰ぎ見れバ向の黒雲一むら立て是ハ風と雨浮ア
なるや又雨と雨浮けるに仲にも侯をも散するやあられ
かかる雲合をみそのはといふをも内に入られハ仲の
若釜のうちより輸しけるを見るを西空横ぎとも
とおもゆる運のみる所ハ其志遠く成ぬ輪迄其れ
我等に御用をさへと勤めの四拾挺調の枝
て牛浮し其ふ細川と堅横引よりうちく八暮
盤の目を盛るに等し其後正雪湯と川髪を振り
我に伽羅をさめて書籍并列帳のるいまで悉集て
焼捨なとして偏に自害の用意とぞ安の西覚東
より駒井右京進殿夜と日に積して七月九日に成て八つ時
分に駿府に及んで御城代大久保玄蕃殿の西

扨て右京進との此丈夫様や方へ云入られけるハ此段
関東より人を付て立退ハ者也不届ニ有之候得共
条依之一旦遂詮議申ニては但かくれ有者ニ無之
事ニ候ハゝ承届覚申ましく候 此味ニとらしい
申候とも承り申間 正雪党と申て仕合丈として
ちんしうらやうしは此市ニ於て多く承候の為
こと若殿にて紀伊大納言殿家来にて申候紀州
へ申入りかるしく付存候ハ紀ちより参りて御出枕と
かく聞けても不礼の拝と存候党ハ依之御対面とらけ
まいうと人ニ不届候ハゝ一両人右方へ人を遣し為
拝御見届てさりとてハいらせられ 右京進殿押返し
ニ御入有之候ハ病躰にて引取ニ有之候得共旅宿或者ニ

八杖ニ御座候へ参りて成為御対面遂らるへくハ天
下の御名代として国の政道を行ハるゝてハとそ申され
けるを扨て四五度之詞戦ひありけるか 夜ハ初めしと
明ゝなり 夜ニ大久保玄蕃殿ハ女へ参る 荒若の横紙破り
にて右京殿ニ向ひ其真参り為若ニ対面とけ申
候とやらん党類共を召捕らるへくハとてしきれ
けれとも右京殿ハ只ととかくとも御挨拶之けれ共
て人を以て云入られしハ当地御城代御役付大久保
玄蕃と申 若御出ニてハそと御聞とゝけ候へぬ
栄真之御挨拶これへ相違之事有や又党へ御出かけ
通度存し申されけれハ正雪ハ彼の為にて候
なりかし 出るを討よとて 陳ニ桃色の裏チ

かゝると云唐後は九くけれは常とゆるりと志めて七
尺杖に盧ゆる様ともいふしかりおほ度大小九尺
隔り立て兎とつれ坊主ふ刀を持せ大守ゝ坪の戸を
開き大久保ま出向ひゝけるハ明夜より格ゝに仕掛
け飛返しさすが流石無し其まゝにいひ何と肌とぬき
比涙に入しとそ肌とぬき色より大久保候とへ给ゆるハ左に
て此事ゆ落合小平次に命じ此あいて尤も飛に御
意は如何に通しゆくへ行向にあらき此事ハ目出度き仕合には
有之翅と以天をかけり不擣とは大海に波有り此其
天ゝるそ此通しにとかく是ひもよしもなく候ゆそ
此と云ふ事を放てよくこれハ西雪も第て逃げ身
て其事入て死に物は入にけん能門にひとゝき流縁にへと

云捨て内ゝを入にけり其後は月給に威ありて人々御さる
器量と称こり変々万能忍能様なりしそさらに食
善悪不二邪正一如とさへしらす西雪とそていへけれ
西雪自害しける　附　麻結分錯しける
斯て爰に西雪と御め油井之丸浦然合にて行秘
九ゑなり吉之助作るに廣然にて外に人なれ御に
並び居て酒盛ととゝ始められ正雪とかるハ時節お哉
して各黄泉は旅に鐵く門出の酒盛と遠く矣
我と共に須ね八山とうつ花は勇なましとも乍
祖は為に討ゝ咸陽宮ハ鉄のましらると以造作されて
と語ふ亡ぬる御のまきはしゝとあしらぬ吾か我と
ありしかふ東照宮ハ数度は殺害と道まいらんか

薬研友ゆきといふ銘を世に伝へて御腹をきらんとせし
なりしが俄に武運のかなしき処にて我なし返りし
丸様なる不覚なりかし霧なる名の刀を覚へさ
り今まで知らぬものゝうちにいれし後悔と思ふもすゞや小刀
を手に年来ある誠あり天人の五衰のけふにあへりと勇
めとして酒盛の今年に一首の書翰を書捨る時
それより起に指置て腹を切るに向ひけるか左ハ僕某々分信
ハ手負へ行きけるや一度三衣剃髪の浮名をなれしまゝ
切腹をせし廣大なり一句のハ偏にかなしきつゝと切て成仏の
名人と成けるとすれバ皆くに心静けに見へける
正霊光を手本にして各往く返身の此世にて
毛ゆるハ只両宗の浄陀といひける氷のとくにす

とき光をたのむ脇腹押しそへ息ひとつして引まはしハ
截腹すべし後ゞと返りハ首ハ前まで落とる
かゝる時御仲とともにかしこに押肌ぬぎ心しく名号唱
へ節目と誦し一時の夢ともなりぬ大久保玄蕃度
酒井左京陽光と共すハ自害と少ゆる只
めされ光たと四方より踏ども名くみも跳
付及役覚と知と積上て られ上る
翁の縄とらる処ハ各力を用力を抜捕て乱入る
友に截腹ハ分信しける時刻移りける又ハともかれ
しうりたる人ハ乱入の時自害とせんと志けるとあへ
なくかりしめとしけれバなりくてかれ人々人事なの
死と迫りて永く拷問の苦患とあへる

西霊書捨らるゝ事　附足洗村にて召捕らる

乱入の後天井放ち居ると上ケて家とさがしけれども
元来きつへき物とハ焼失の只物の外は鼠の巣蜘の巣
取りゐるさて右京殿の玄蕃殿小平治殿三人立合見聞
改めよ書捨一通を披き読れ三人に見せ申
されるいはつく聞よう書けるは男業の西霊なるとて
申されける其文ニ曰
今度謀奸の私儀叛逆の根元を申立候処
免角てあり候事弁私共連日代々天下合戦
変可叶候事無之候得共天下の剣法無之広大にして
て上下困窮仕る心有者誰か不悪候小松平
殿ゐよめ度雖之諫て遁世却狂人の様に成志候

成ゐ候て先天下の大成　上様御為不足至極
私共不肖の者に候得共天下困窮致不讃被為在今
遠流かる謀催偽人数皆今公儀城山居りて天下の
長久之御政道と申上如何様に成る事に
相謀候へども不肖之者の浅ましさに候紀伊大納言様の名
を借り不申候ては人数催語ひ難く候間偏に扶持
を蒙りたると申候私共誰人よりとも扶持申うけ
候にてはなく此分無之候へは申世間
数多の者に候へは申候
慶安四辛卯七月廿六日
いちょう首とハ右正雪之一通也
遂に以関東へ捕下し生捕の者共一々拷問ありけれ廉

役しうらさ兼ね横て陰と安否へられハ天の網のかれ
かたくおもひい人手に渡り闕所へ引かされんも口惜し
幸ひ天王寺ハ佛法最初の寺なれハいさきよく亀井
の水にて未期の水のどをうるほしいさきよく死を遂く
るやとおもひ切て夜に隠て忍ひ入て人静まりて後ん為
つねに念佛を唱へ高声に唱て後十文字に腹を
かき切て一蓮託生の縁となりけり
加茂市右衛門江戸へ引きける
既に吉田神左衛門後府へ参りしかれハ扨て新倉付
けるハ金井半兵衛ハ死にしけるや此横なとは神左衛門
と拷問して尋ぬへき由申されける所に突然と大坂より
早打を以て天王寺にて自害の趣き申し由来たるを告て

告来りけれハ數ヶ度之しつと小右衛門檀助を呼出し是を大
將をうけて拷問への拷問を見るまさしく後府なき
金井半兵衛七と申せは答えと塩漬にして關東へ送
り品川にて獄門の恥をさらしけり右此等兵衛五人の
大將なりけるに依て手科なりかたりしかは吉田神左衛門拷
問度々に及ひ白状なりけるハ京都朱雀に加茂市右衛門
谷の兵衛と申者二条の御城を心掛ケ所在の由所へ
りけれハ此刻を恐に移是へ乞と討手をそ向られける市右衛門
是非に及ばす大将へ立退へき様もあらされ支配の者共
是非につかまらひけれハ加藤に討たれとしれふひ羊の
あゆみに近しき自身をそ墓しける　既に後府より
此討手京都にして　あらことかしこかなり　直に東武に

か勢ニ仰付ハ己外酒井右京亮殿ゟハ秋田安房守
殿ニも久能御城加勢御儀共心を合らるへきよし
三奉行へ有けれも安房守殿より物頭十人足軽添
て相きハ答ニ定るのいたしけれ人数ニハ荒木金左衛門
杉原桃田源左衛門奥村右衛門出十川又左衛門馬場甚右衛門
永田庄右衛門 春木七左衛門多賀権左衛門而てをつれ
り文くなりけり 安房守殿自身出かけ於御城ニ右京亮進殿
より御作出此ハ右をふく止こなりとらや
事ら定らりるに事なり

油井根元記巻之五

駿府所中騒動之事 附 美濃守殿自分関所をかたむる事

又拷問よりて事顕れ上りけるハ七月廿八日の夜に至て
鉄炮五十挺騎馬廿騎にて駿府へ出かけ来りけれハ各立合ひ
候ける大将として平山五左衛門平味作右衛門芝木
又左衛門目付右衛門是ハ旗本にて此上ハ是に依て安房
守殿と秋山玄蕃頭殿小平作殿其外諸役人不残
甲冑を帯し弓に弦をかけ鉄炮に玉薬を込て北へ
らるゝ是を見て駿府町中老若男女一同に騒立て
子ちや軍する也と見り兎て云ひ捕ものあれ後れへき
様なく歩むべき道もなきに押合ひ逃走りて親ハ
親を失ひ呼とあり子を尋て走り親をたづねて

学もあり天をと請て咽と渇し人の食物をう
らいて飢とたすけ手を挽いなど津浪にあたる
濱のふとく町を行小平次との再三制すれども
人をとくづをかけ諸人の袂とはいりて川ぬづき衣
四に町中は人をけとなく松柏の茂する秋風は袖を浚
りて目とあらし此象色なり強盗山賊の者ども
入られ家財雑具を持運びうしなく是れは家
にあるなる用心と附置て色とからせらる其後都に
もしるやかりられを一条手沙汰ありとて盗賊
多く吏のとありしは七月の末の白状なる家に放火せし
付をとは不しよきのこの心の附ふよりとや馬と以東
武にも知らせける依て箱根の関所とも出番往還

とふの賣買の通路是ららに物をとられて焉
くもの数のあるなり九稲葉の沙汰もなし出子師自分
箱根にも注られ物具を枕元に伽となしては
されりり返されし此白状の意領知られたる後
府の役人は皆拷問と止て事なきと東武へ返され
けり

右の拷問ここう
伏関所よりは丸橋忠弥横しの拷問と以責られ
されども只志しぬとも無いはず止なり後日の外は
体の皮目と肉のふしても筋と縫を肉のいれ炭火と
山とふし四方より團扇と以てあふぎ立る焔は丸橋
身と焦せは油流して鳴油煙みちて袂に煙そ

候ゆゑ阿鼻大焦のくるしみを免るはこしとみえ
みゆる監にて松平伊豆守殿丸橋にむかひ其侭いふ
ゝ苦しみいふや只徒党の人数を一々白状いたされい
さなくハやいなと申さるゝ時ハ一ヶ年二年三年とう
きめに成事とてもめいもや只白状させて縛と
縲紲しく候しまゐられハ太平閉ゐる眼をくわりと
開て伊豆守殿に水を乞まれハ鍋の天目に入せて伊豆
守殿自身あてられけれハ所振る千万忍従しけれと
天目をかへしふさし座中ゆるハ人ケ所ある事にや縲
を武士の敬にてはなりて蒙りける苦しみとても白
状に及へきやハ伊豆守殿也の武士ら武士との
み問ゐふ所存ふきとおもへは我か一身や当国の
押領使ゐてをも為る大方ハ立合水一滴を減ずま敷
云ゝ但て不ゝ人云はまは十くも十人や大人でもふるい
入ても不てハ何の用にも立ず悪ざ凡二三千余の徒党
是て何とすとして何ぞ申覚へてかくハ頬ゝ面ゝかゝる
と不浄地なれハ不漏沙蒙裙川の流を汲て源平
度橋なれ工商の八ッをならべらるゝも也ゐハ人の貴ハ分
のせぬ人の害ハ分の害なりと云けれハ伊豆守殿ふ
なうして其日ハ獄屋へ返されけり
吾と這進の者あらず
去ぬ不ゝあらでも徒党の者偏に此等の魚
此をしうて唯科の由ゆるさるへきとものゝ葉
煩ひゆる髪長たる小川をたまつと入魂成ける蜜ゝ

八月十四日訴人にてのたまはされ各国に騒動と止るのみ
厚き君賞にあつかり二度人口の誉れとそなりける扨手
伊豆守殿家来奥村権之助五百石白銀十枚帷子肴物
おほせ下置きゝし町人ともに石高ハ計度に組入られ候けり
之子代末まで於大変とぞ削えし町人方師夫妻に白銀
百枚米など俵を下置剤五る俵ハ永代の家督とぞ
成みるるこれ迄ふたたびもうらやみ出しき不ま病気にてそれ
少しなくなりし果して病死にいたる矢場栄的といへる町
醫師をも訴人の人数にて加へ甚だ依ありけり
傾しけり何様此上は此太平之まへさん名君の貴ハ鏡玉
に鏡なりと人みな思へり古書曰以銅為鏡可正衣冠
以古為鏡可知興替以人為鏡明得失とは誠なるかな

依て天下安全国土長久にてめでたしなりと悦ばれたるハ
なかりけり

油井記大尾